

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

柄鏡形住居の出現期の再検討：
地域の遺跡群研究の視点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院 公開日: 2023-02-07 キーワード: 作成者: 川島, 義一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001449

柄鏡形住居の出現期の再検討

—地域の遺跡群研究の視点から—

川 島 義 一

論 文 要 旨

縄文時代中期末葉の神奈川県港北ニュータウンの遺跡群西部地域を研究対象に、柄鏡形住居址の出現期の様相を分析することにより、その出現の背景を検討した。その分析方法として、多様な遺構属性の組み合わせからなる柄鏡形住居址を含む竪穴住居址の分類にあたって、研究者の主観によるバイアスをできるだけ排除するために、客観的で検証可能な多変量解析の多重対応分析とクラスター分析を用いた。

5遺跡の76例をもとに分析した結果、柄鏡形住居址の出現前は、各住居址の遺構属性の組み合わせは非常に多様であった。柄鏡形住居址は、それらの遺構属性を引継いで張出部と敷石・周礫を付加したものであり、張出部単一の要素をもって、同じ種類の遺構に一括りにすることはできないことを示した。

また、柄鏡形住居址が構築された場所に注目すると、まず遺跡内の住居址の集中地区や土坑墓群の近辺に出現し、その後遺跡の外縁部にも展開していることを確認した。しかし、出現期の柄鏡形住居址の近辺には、これと類似する住居址は検出されず、むしろ周辺遺跡に類似度の高い住居址が見られた。これらから柄鏡形住居址は、従来からの遺跡内の遺構配置パターンを継承し、空間構成を維持しつつ、地域の遺跡群全体に分散して継承されていることを明らかにした。

はじめに

縄文時代中期末葉には、拠点的な環状集落が終焉を迎え、集落の小規模・分散化が進んだ。「柄鏡形住居址」は、張出部や柄部と呼ばれる特徴的な形状をもつ住居址で、当該期のほぼ同時期に関東・中部地方の山地寄りの各地に突然出現し、急速に広まった。

本論では、その柄鏡形住居の出現期の様相を単一の遺跡ではなく、周辺の遺跡を群としてとらえることにより、柄鏡形住居が遺跡群の中でどのように展開していったのかを検討し、その出現の背景を考えてみる。なお遺跡群として、神奈川県港北ニュータウンの遺跡群西部地域を対象とし、分析方法には、従来の主観的な竪穴住居址の分類を採用せず、客

観的で検証可能な数量的解析法である多変量解析を用いた。

1. 柄鏡形住居址の研究史と問題点

柄鏡形住居址は多くの類例が報告されているが、柄鏡形住居址がその形成された時期や地域により多様な特徴をもっていることから、その名称や起源について研究者によりとらえ方が異なっている。山本暉久は、中部山地の「石柱・石壇」を起源とする敷石風習と、埋甕をもつ小張出を起源とする張出部が融合して、柄鏡形（敷石）住居が成立したと考えている（山本1976）。本橋恵美子は、中部山地の屋内敷石と隅円方形で小張出部に対ピットと埋甕をもつ潮見台型住居址とが結びつき、柄鏡形敷石住居として成立したとしている（本橋1988）。このように敷石や埋甕にその起源を求める研究者が多いが、実際には敷石や埋甕をもたないものも多く、柄鏡形住居とは何かということになると明確な定義はなく、村田文夫が述べているように「張り出し部を有する住居址（村田1975）」が妥当なところである。またその名称や各部の呼称も研究者により異なっている。本論では名称として「柄鏡形住居址」を用い、各部は図1に示す呼称を用いる。

ところで柄鏡形住居址に限らず竪穴住居址の研究では、その分類は研究者の主観的な判断で行われることが多い。しかし、竪穴住居址がもつ属性には、主体部寸法、主体部形状、柱穴数、柱穴配置、炉形態、張出部、敷石、埋甕の有無や設置場所など数多くの属性があり、それら属性間の対応度や類似度に対する属性の寄与度などが客観的データとして明示されないために、その分類の当否を検証することができない場合が多い。

このような住居址の分類に関しての問題に対して、赤澤威と埴原和郎は、長野県与助尾根遺跡の28軒の住居址を主成分分析のQモード因子分析法を用いて分類し、その根拠を明確にして従来の分類との差異を明らかにした（赤沢・埴原1978）。松岡達郎は、北海道白尻B遺跡および周辺遺跡の112軒の住居址を数量化Ⅲ類と因子分析を併用して分類を行い、時間的、空間的な系譜関係を明らかにした（松岡1982）。また谷口康浩は、青森県三内丸山遺跡の住居址220軒を土器型式によらず多変量解析の数量化Ⅲ類と主成分分析を組み合わせ分類し、同遺跡の

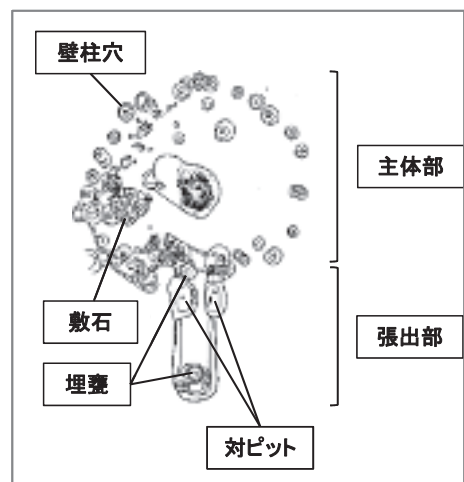


図1 柄鏡形住居址の各部呼称
(月出松遺跡-J21住居址)

6つの集落ステージの空間構成の変遷を明らかにした（谷口2003）。

そこで本論においても、従来の少数の遺構属性による主観的な分類を離れ、住居址の遺構属性間の対応度合やその類似度を多変量解析を用いて分析することにより、出現期の柄鏡形住居址についての検討をおこなう。

2. 分析対象の遺跡群

対象の遺跡群として、神奈川県横浜市の港北ニュータウンの西部地域に位置する小丸遺跡、高山遺跡、二ノ丸遺跡、月出松遺跡、加賀原遺跡を取り上げる（図2）。これらの遺跡群は、谷本川と恩田川が合流し鶴見川となる合流点の北東方向の台地上に位置し、北端の小丸遺跡から南端の月出松遺跡まで約2kmの間に南北に連なり、大小の谷によって隔てられた台地や舌状台地上に点在している。港北ニュータウンの開発にともない広い範囲の発掘調査がおこなわれ、集落の全体像が把握できる遺跡が多いこと、多くの住居址とくに出現期の柄鏡形住居址が数多く検出されたこと、集落内の住居址配置や住居址、出土遺物の実測図などの情報が入手可能な発掘調査報告書が発行されていることなどから検討対象とした。なお同地域にあり、加曾利EⅡ式期からEⅣ式期までの住居址107軒が発見された、この地域最大規模の三の丸遺跡は、発掘調査概報から得られる情報が十分でないためここでは参考にとどめた。また、柄鏡形住居址の出現時の様相を詳細に分析するために、柄鏡形住居址が出現する加曾利EⅢ式期からEⅣ式期に限って分析を行った（註1）。

これらの各遺跡の時期ごとの住居址数を、分析対象時期の前後を含めて概観する（表1）。

小丸遺跡 中期前葉から中葉にかけて小さな集落を形成したのち、加曾利EⅢ（新）式期の4軒の住居址をのぞき、後期前葉まで集落を形成していない。しかし、堀之内1式期以降、加曾利B式期にかけては34軒の住居や掘立柱建物が重複を繰り返している。

高山遺跡 中期前葉から中葉にかけて舌状台地の先端に馬蹄形に集落を形成したが、加曾利E式期になると住居数



図2 港北N T西部地域の遺跡分布図
（国土地理院電子地形図に加筆）

表1 分析対象とした5遺跡の時期別住居址数

遺跡	時期	中期中葉 以前	加曾利				称名寺 式期	堀之内 式期以降	合計		
			E I 式期	E II 式期	E III 式期					E IV 式期	
					古段階	新段階				古段階	新段階
小丸遺跡	柄鏡形住居址							5	5		
	非柄鏡形住居址	10			4				14		
	小計	10			4			8	22		
高山遺跡	柄鏡形住居址					1	4		5		
	非柄鏡形住居址	61	3	1		1			105		
	小計	61	3	1		3	5	1	113		
二ノ丸遺跡	柄鏡形住居址				3	3	1	5	12		
	非柄鏡形住居址	2	10	22	12	2	1		90		
	小計	2	10	22	18	7	2	6	113		
月出松遺跡	柄鏡形住居址					2	4	3	1	10	
	非柄鏡形住居址	10	19	15	22	5	2			70	
	小計	6	19	14	20	5	4	4	3	104	
加賀原遺跡	柄鏡形住居址					2	3	1		6	
	非柄鏡形住居址	3		4	1	1				10	
	小計	3		4	1	2	2	3	1	20	

小計には、形態不明および時期不明を含む。

が減少し、加曾利EⅢ（新）式期にはいったん途絶えてしまう。加曾利EⅣ（古）式期になるとふたたび3軒が出現し、加曾利EⅣ（新）式期には5軒と小規模ながら集落を形成した。ところが、これも称名寺式期になると再び途絶えた。

二ノ丸遺跡 中期中葉にわずかであった住居址が、加曾利EⅡ式期から増加し、特に加曾利EⅢ式期に急増しピークを迎える。しかし、加曾利EⅣ式期には急減し、称名寺式期にはわずかに増加するが後期前葉で終焉を迎える。この二ノ丸遺跡は、北東に先端部をもつ舌状台地上の集落で（図3、図4）、中央に土坑墓群をもち、住居址が南北の二群に分かれて重複を繰り返しているが、中央の土坑墓群の部分には各時期を通じて住居址は進出していない。

月出松遺跡 勝坂式期に遺跡の形成が始まり、加曾利EⅠ式期からEⅢ（古）式期にかけて50軒以上の住居を検出している。加曾利EⅢ（新）式期になり減少するが称名寺式期まで継続し、堀之内式期で集落が途絶える。月出松遺跡は、これも舌状台地の基部から先端部にかけて集落を形成している（図4）。ここでも住居址が南北の二群に分かれて重複を繰り返し、この北群の中央と南群の北側に二つの土坑墓群をもっている。南群のさらに南、台地先端部には加曾利EⅡ式期からEⅢ式期の4軒の住居が点在している（月出松南遺跡）。これらは月出松遺跡と同一の集落であったと考え、月出松遺跡に含めて検討をおこなった。

加賀原遺跡 発掘されたのが集落の一部であり集落の全容は不明である。しかし、この限られた場所からは、勝坂式期の住居を3軒検出し、その後、加曾利EⅡ式期4軒、加曾利EⅢ式期4軒、加曾利EⅣ式期5軒と集落は継続している。

このように、この地域には中期中葉以前にピークをもつ高山遺跡や、中期後葉前半から後期初頭にかけての月出松遺跡、中期後葉後半にピークをもつ二ノ丸遺跡や加賀原遺跡な

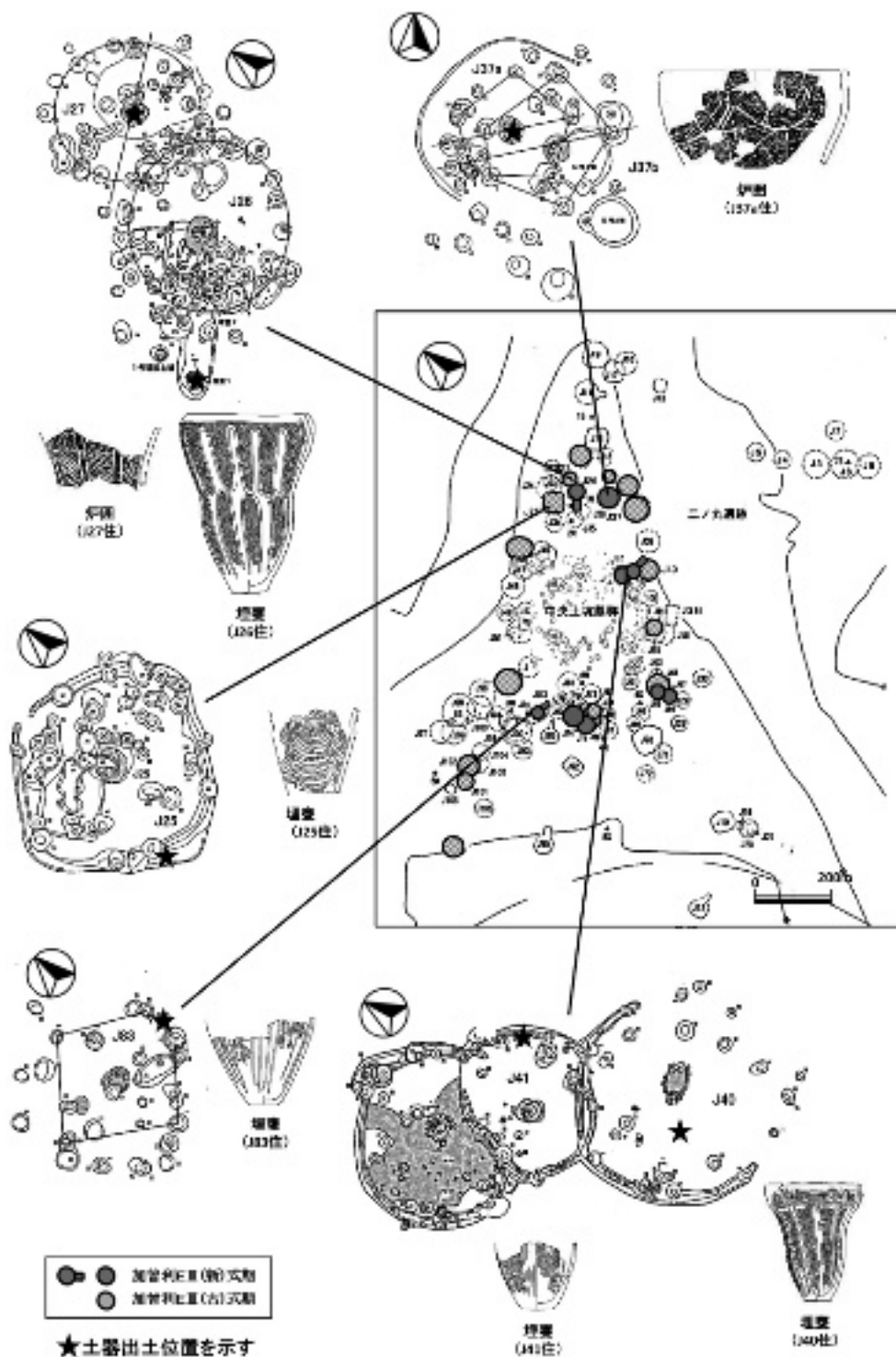


図3 二ノ丸遺跡の住居配置図(加曾利EⅢ式期)
住居址：S=1/160、土器：S=1/16

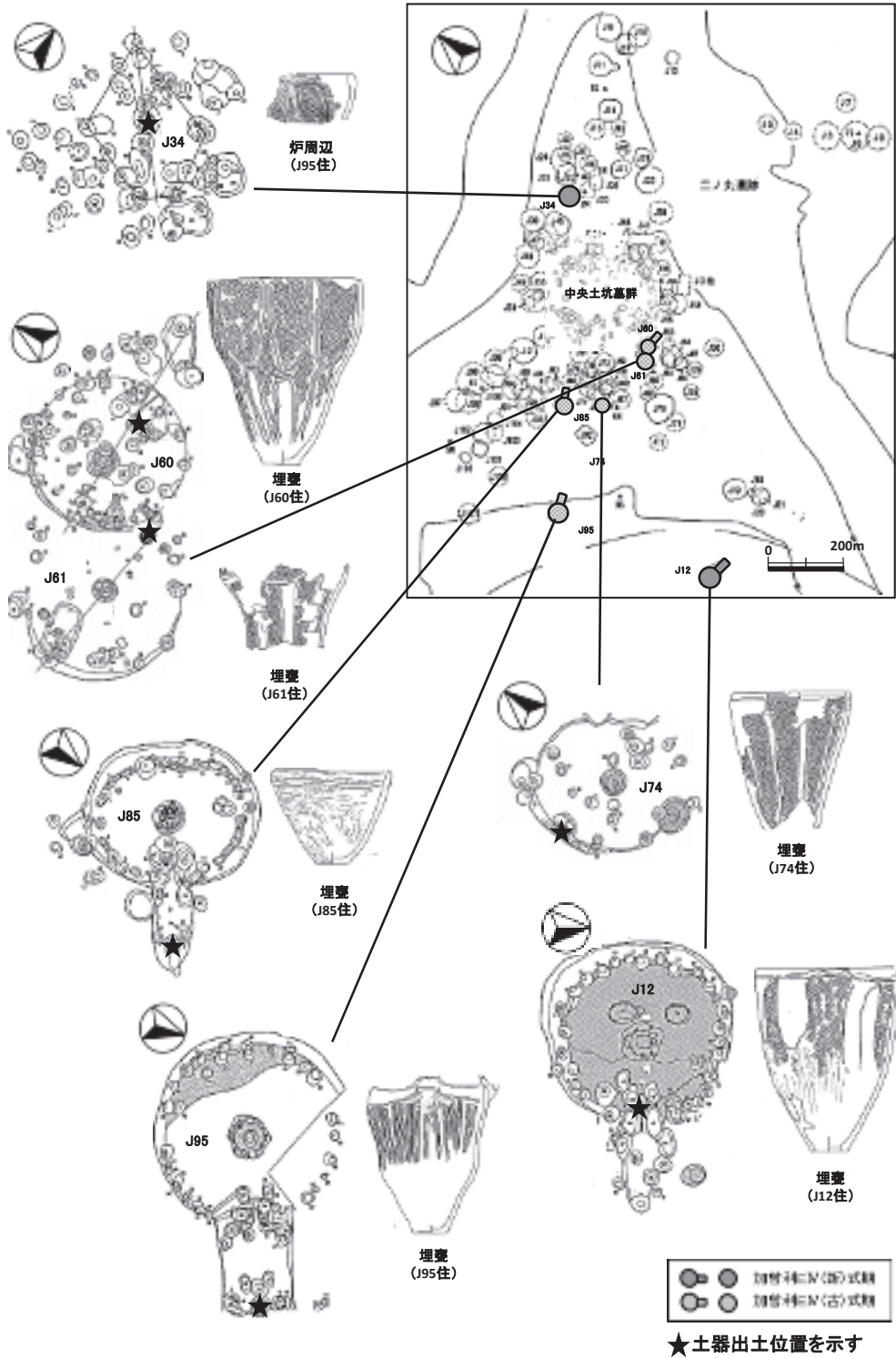


図4 二ノ丸遺跡の住居配置図(加曾利EIV式期)
住居址：S=1/160、土器：S=1/16

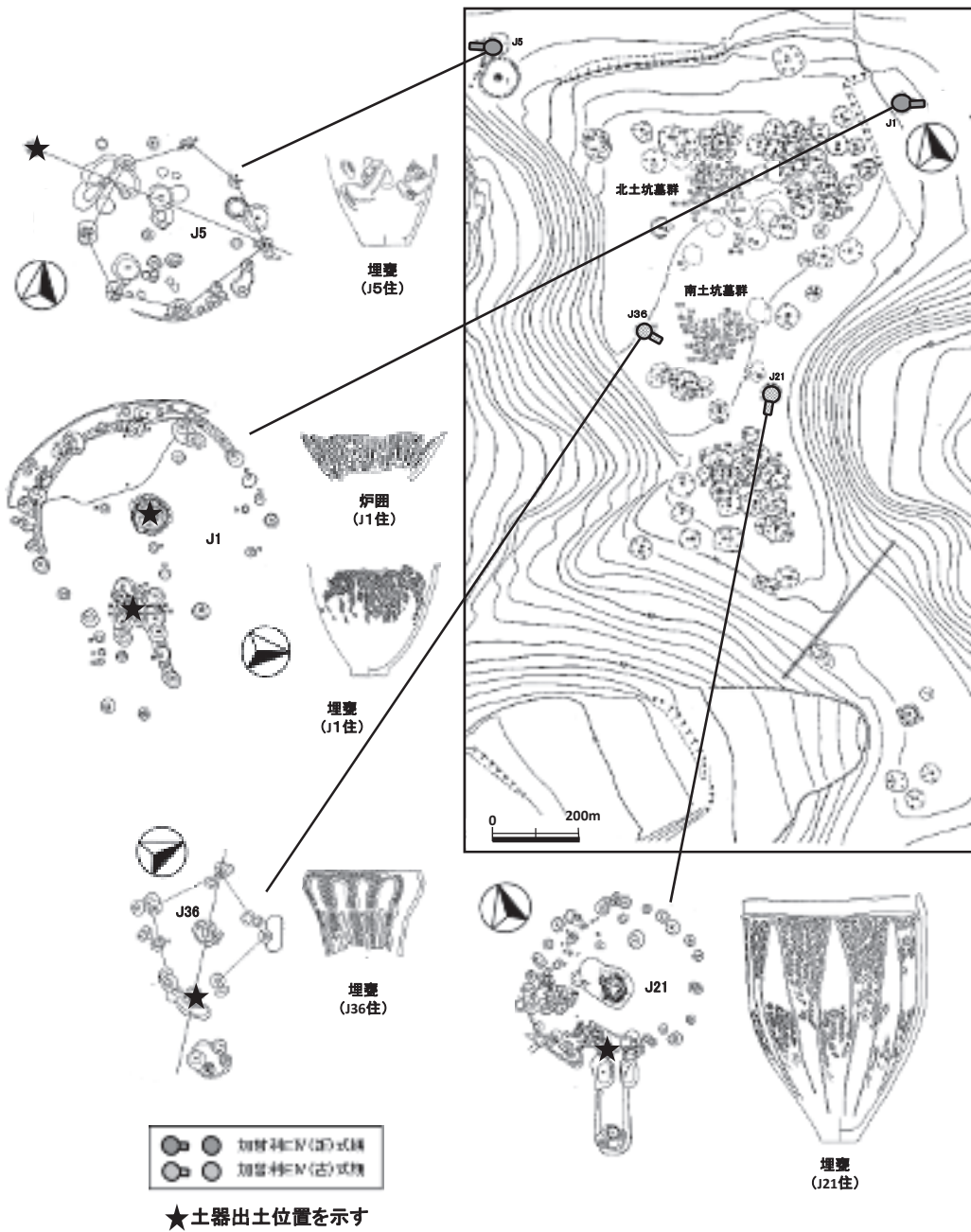


図5 月出松・月出松南遺跡の住居配置図(加曾利EⅢ・IV式期)
住居址：S=1/160、土器：S=1/16

だが、その形成時期をずらしながら狭い範囲にまとまっている。

そこで本論では、柄鏡形住居址出現の前後である加曾利EⅢ式期からEⅣ式期の住居址が数多く検出されている、二ノ丸遺跡と月出松遺跡を中心として、その他の遺跡の当該期の住居址を含めて分析し、地域内の遺跡群の関係を、柄鏡形住居址を含む住居址の遺構属性がどのように継承されていったかという観点から分析する。なお、各遺跡ともに土地削平などによりその属性を把握できない住居址や、埋設土器などの遺物が少なく時期を明確にできない住居址が少なからず含まれている。今回は分析の精度を上げるためにこれらは分析対象とはせず、分析対象としたサンプル数は表1に示す住居址数よりも少なくなっている。

3. 分析方法と住居址の属性

(1) 住居址の分類

多変量解析には様々な分析方法が提案されているが、本論では住居址のもつ属性間の対応度を分析するために多変量解析の多重対応分析を用い、さらに住居址の分類をできる限り客観的に行うためにクラスター分析を行った。

これらを用いて分析する住居址の遺構属性として、張出部の有無、柱穴配置（7カテゴリ）、壁溝タイプ（4カテゴリ）、炉形態（5カテゴリ）、敷石の有無（註2）、埋甕の有無の19項目の属性を設定した。

一般的に住居址の分類には、主体部の形状を重要な属性として組み入れることが多いが、今回対象とした各遺跡では土地削平などの影響や、本来掘り込みが浅かったことなどから主体部形状が不明確な住居址が非常に多かった。

そのため主体部形状は属性から外し、代わりに7つの柱穴配置カテゴリを採用した。このうち「四角形」は4本の柱で構成されるもので、正方形、長方形、台形を含めて四角形とした。「五角形a」は方形に配置された4本の柱と奥壁側に設けられた1本の柱により構成されているもので、「五角形b」は奥壁側に1本の柱をもち、残りの4本で構成される四角形が逆台形で、出入り口側の2本の柱の間隔が狭くなっているもの、「五角形c」は出入り口側に1本の柱をもつ逆五角形のものである。「六角形a」は6本の柱で構成され、奥壁と出入り口に頂点をもつもので、「六角形b」は奥壁側と出入り口側が六角形の辺に対応しているものである。「壁柱穴」は、比較的細い柱が主体部壁際をほぼ均等な間隔でめぐっているものである。

なお分析方法は異なるが、石井寛が二ノ丸遺跡の住居址の柱穴配置を同様に分類し、時

系列的な集落の変遷について検討を行っている（石井2014）（註3）。

壁溝の4つのタイプは、柱穴と壁際に設けられた壁溝の組み合わせから分類した。港北ニュータウンの各遺跡では、壁溝をもつ住居址が非常に多く、そのほとんどには壁溝内に細い柱穴を設けている（図3のJ25やJ40住居址など）。この壁溝の目的は明らかではないが、壁溝が全周の半分程度設けられている住居址では、壁溝がない部分が斜面下側に面していることから、雨水などの住居への侵入を防ぐためであったのではないと思われる。壁溝タイプ1は主柱穴で壁溝をもたないもの、壁溝タイプ2は主柱穴と壁溝内の小柱穴を合わせてもつもの、溝タイプ3は壁柱穴のみを壁溝内にもつもの、壁溝タイプ4は壁柱穴のみで壁溝をもたないものと分類した。

炉形態は、石囲炉、埋甕炉、地床炉、土器片囲炉、土器片石囲炉の5つのカテゴリーに分類した。

なお張出部については、それが明確な住居址は分析対象76軒のうち14軒であった。この14軒の住居址はすべて壁柱穴であったが、それぞれの報告書にもあるように、五角形bの柱穴配置をもつ住居址にも張出部をもつ可能性のあるものがある。石井はこの五角形bの柱穴配置をもつ住居址を「初期柄鏡形（住居址）」とし、張出部の有無が不明確な住居址も柄鏡形住居址としている（石井2014）。この五角形bの柱穴配置をもつ住居址は、なぜか残存状態が悪く、特に張出部部分が削平されている住居址が多いため張出部の有無判定が非常に難しい。そこで今回の分析では、五角形bの柱穴配置をもつ住居址8軒は、張出部をもつものとして分析し、分析結果からこの当否を考えることにする。

このように、住居址がもつ属性の分類を各遺跡の対象住居址である全76住居址について行った後、これらの住居址を一括して分析を行った。

(2) 多変量解析による分析

本論の多変量解析には、パソコン上で動作する「R（version 3.0.1）」を用いた。Rは1990年代からネット上で開発されているフリーソフトでそのソースも公開されており、世界的に使用されているソフトウェアである。簡単なコマンド入力で各種の統計計算が行え、その結果をグラフィックス出力できる非常に便利な統合ソフトウェアである。

多重対応分析

最初に、住居址のもつ属性間の対応関係を明らかにするために、Rに含まれるパッケージの「FactoMineR」を用いて多重対応分析を行った。これは今回の分析の目的が、予測や変動の原因を調べるのではなく、またそのデータが属性の有無という質的データであるためである。なお、「FactoMineR」を用いて分析を行うためには、属性の有無を「0」「1」

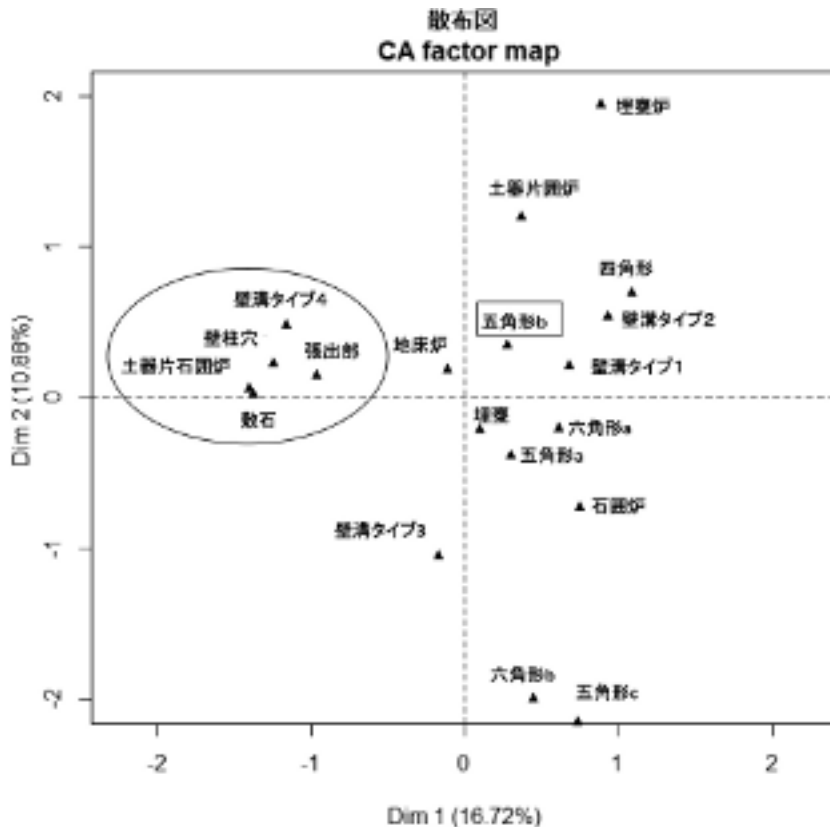


図6 住居址のもつ遺構属性の散布図

形式のダミー変数に変換することが必要である。

「FactoMineR」を用いた多重対応分析では、データ表の行の項目（住居址番号）と列の項目（属性）の相関が最大になるように行列計算を行い、分散（Variance）の大きい順に、第一主成分（Dim 1）、第二主成分（Dim 2）・・・とし、この第一主成分をX軸、第二主成分をY軸とした散布図上（図6）に、属性の対応関係が属性間の直線距離として表示される。つまり近くに位置する属性間には対応関係があるということである。

クラスター分析

続いてサンプルとした76軒の住居址をその属性の類似度から6つのクラスター（註4）に分けるクラスター分析を行った。クラスター分析とは、各住居址の属性の有無を基に、住居址間の似ている度合い（類似度）、似ていない度合い（非類似度）を定量的に解析し、類似度の高いものを同一クラスターに、類似度が低いものを別クラスターに分類する分析法である。クラスター分析では、一つの結合段階でクラスターの結合・分岐を行う階層クラスター分析を用いた。階層クラスター分析を行う最大の利点は樹形図を出力することが

できることである。一般に階層クラスター分析は、分類対象となるデータ数が多くなると計算量が非常に多くなるため、計算時間や手数がかかることが欠点とされていた。しかしパソコン上の「R」を用いることでこの欠点を解消することが可能となった。

今回のクラスター分析には、「R」に含まれるパッケージの「vegan」を使用し、サンプル間の類似度を示すサンプル間の距離の測定には、分析データが「0」「1」形式のバイナリーデータであるため「Jaccard 係数」を用い、クラスター間の距離測定方法には、各結合ステップにおいて各サンプルを結合することにより移動したクラスターの重心と、クラスター内の各サンプルとの距離の2乗和を最小にするように距離が定義される「ウォード法 (ward)」を用いた。

この分析結果をわかり易く表示したものが樹形図 (図7) である。樹形図では、各分析対象の結合を示す線の高さは結合距離を表すので、図の左方で結合するものほど類似度が高く、右方で早くに分岐し遠い位置にあるものとは類似度が低いことになる。これをわかり易くするために、分類されたクラスター番号を同図に追記した。同じクラスター番号のもの類似度は高く、クラスター番号が離れるほど類似度が低くなる。さらに同一クラスター内でも樹形図の左端で直線にて結合されているものは非常に類似度が高いのである。

4. 分析結果からみる出現期の柄鏡形住居

(1) 多重対応分析

まず多重対応分析の結果である属性の散布図 (図6) を検討する。各住居址の属性間の対応関係の強弱をみるこの図では、第一主成分である Dim 1 と第二主成分である Dim 2 の寄与率の合計値 (累積寄与率) が大きいと、属性間の対応に対して寄与率が高い、つまりある属性間の対応が強いと判断できる。しかし、今回の結果では、その合計値が26.7%と非常に低かった。これは分析した各住居址の遺構属性の組み合わせが、非常に多様であることを示している。このような多様性を示す遺構属性の組み合わせではあるが、図中の左側に張出部、壁柱穴、壁溝タイプ4、土器片石囲炉、敷石はまとまっていることから、これらの属性間には比較的対応があると判断できる。つまり柄鏡形住居址は多様性が少なく、比較的まとまった遺構属性の組み合わせであることを示している。なお五角形bの柱穴配置はこれらから離れており、張出部などの属性とは対応関係がないということになる。これは五角形bの柱穴配置で張出部をもつ住居址の出現は加曾利EⅢ (新) 式期以降であり、それより古い五角形bの柱穴配置をもつ住居址は張出部をもっていないためこのような結果となったと考えられる。

表2 時期別のクラスター分析結果

クラスター	加曾利				軒数
	EⅢ式期		EⅣ式期		
	古段階	新段階	古段階	新段階	
クラスター1	1	5		1	7
クラスター2		2	5	6	13
クラスター3	13	6	1	1	21
クラスター4	14	3			17
クラスター5	9	3			12
クラスター6		1	5		6

(2) クラスター分析

分類結果

クラスター分析の結果である樹形図（図7）を検討する。なおクラスター分析では、それぞれの住居址がなぜそのクラスターに分類されたかは直接には表示されない。そのため、分類結果からそれぞれのクラスターに含まれる住居址の特徴を確認する必要がある。

クラスター2に分類された住居址13軒は、張出部、壁柱穴、敷石をもち、2/3の8軒が、土器片石囲炉をもつものである。このクラスター2の住居址以外にも、クラスター1に分類された月出松遺跡-J5住居址は張出部をもっている住居址である。この月出松遺跡-J5住居址は、壁柱穴と埋甕をもつが、地床炉であり敷石ももたないため異なるクラスターと判定されたとと思われる。

先に張出部をもつとして分析を行った五角形bの柱穴配置をもつ住居址8軒うち、地床炉と埋甕をもつものはカテゴリー6に分類され、残る二の丸遺跡-J37a住居址と小丸遺跡-37号住居址は、地床炉や埋甕をもたないためクラスター3に分類された。これら五角形bの柱穴配置をもつ住居址8軒が張出部をもつかどうかの判断は、この分析結果からだけではできないが、張出部をもつものとしてもクラスター3やクラスター6は、樹形図の右側の分類の早い段階で枝分かれしており、クラスター2の柄鏡形住居址とは類似度が低い別系統の住居址であるということがわかる。

これは張出部という単一の共通点をもっていることのみで、これらを同じ分類の住居址と判断することはできないことを示しているのである。

分類結果の時期的推移

クラスター分析の結果で住居址を時期別に分けて検討する（表2）。クラスター1は、加曾利EⅢ（新）式期が中心である。クラスター2は、加曾利EⅢ（新）式期に現れ、加曾利EⅣ（新）式期までつづく。クラスター3は加曾利EⅢ（古）式期が多く、加曾利EⅣ（新）式期に向けて徐々に減少する。クラスター4、クラスター5は加曾利EⅢ式期のみで加曾利EⅣ式期には現れない。クラスター6は、加曾利EⅢ（古）式期の後加曾利E

Ⅲ（新）式期にはなく、加曾利EⅣ（古）式期に現れるが、加曾利EⅣ（新）式期へは続かない。この結果をみると、クラスター4、クラスター5は加曾利EⅢ式期で終わる遺構属性の組み合わせであり、それに代わって新たにクラスター2やクラスター6の柄鏡形住居が出現してくるとみえる。

しかし、分類結果による判断は慎重に行う必要がある。たとえば壁柱穴は、加曾利EⅢ（古）式期の二ノ丸遺跡J27住居址がすでにもっており、今回の分析対象とはしなかった加曾利EⅡ式期の二ノ丸遺跡J11b住居址、J45住居址、J99住居址などにもみることができる。また五角形bの柱穴配置をもつ住居址は、加曾利EⅢ（古）式期の月出松遺跡J76住居址や二ノ丸遺跡J32が検出されている。このことから柄鏡形住居址は、それまでの遺構属性の組み合わせを捨て、新たに加曾利EⅢ（新）式期に突然出現するのではなく、それまでの多様な遺構属性の組み合わせを引き継ぎ、そこに張出部を設け、敷石・周礫を施したと考えるべきであろう。

じつはこのような指摘は、初源期の柄鏡形住居の柱穴構造を検討した櫛原功一や石井寛がすでに行っている（櫛原1995、石井2014）。とくに櫛原は、「柄鏡形住居は、中期後半までの主柱構造をもつ竪穴住居に柄部を付加した形で出現した」と述べている。ただ柱穴配置については「出現期の柄鏡形住居に壁柱穴は未成立」であり、出現期の「主柱穴タイプ」から、主柱穴と壁柱穴の混在する「壁柱穴Aタイプ」を経て、壁際に密集する「壁柱穴Bタイプ」へ変化するとしている（註5）。しかし、今回の結果から、当該地域の出現期の柄鏡形住居址は当初から壁柱穴をもっており、それは前時期からの継承であることがわかった。

5. 考察

(1) 柄鏡形住居址の展開について

今回対象とした住居址のなかで、出現時期の早い加曾利EⅢ（新）式期の柄鏡形住居址である二ノ丸遺跡のJ26住居址、J41住居址、J83住居址を検討する。J26住居址、J41住居址の2軒はクラスター2に属し、ともに壁柱穴ではあるが壁溝、敷石、埋甕の有無で違いを見せている。このクラスター2の中で、J26住居址と非常に類似度が高いのが、樹形図の一番左側のレベルで結合している加曾利EⅣ（古）式期の二ノ丸遺跡 - J95住居址、月出松遺跡 - J21住居址、加賀原遺跡 - 8号住居址、9号住居址であり、J41住居址と類似度が高いのは、加曾利EⅣ式期の高山遺跡 - 18号住居址や二ノ丸遺跡 - J12住居址である。

二ノ丸遺跡 - J 83住居址が属するクラスター 6 でこれに近いのは、月出松遺跡の加曾利 E IV (古) 式期の J 36住居址や同じく加曾利 E IV (古) 式期の高山遺跡 - J 19住居址である。これらは張出部をもつ可能性があるが、柱穴配置は壁柱穴ではなく五角形 b、壁溝タイプ 1 で地床炉と埋甕をもつ共通点がある。

このように、二ノ丸遺跡の J 26住居址、J 41住居址、J 83住居址の 3 軒は、同じ時期の同じ集落内の柄鏡形住居址と考えられるが、分類はクラスター 2 と、それとは早くに枝分かれする別系統であるクラスター 6 に分かれており、類似度が低いのである。

さらに、これら住居址の遺跡内の配置を検討してみる (図 2、図 3)。J 26住居址は中央土坑墓群の北側の住居が繰り返し構築された地区の中央に位置し、すぐそばからは埋設土器 (1 M、2 M) や集石遺構 (2 S) も検出されている。この近辺で前時期の加曾利 E III (古) 式期とわかるのは、J 26住居址が切っている J 27住居址と西側の J 25住居址であり、加曾利 E III (新) 式期では J 37住居址である。これらの住居址は J 26住居址と同じクラスターではなく、J 25住居址がクラスター 4、J 27住居址がクラスター 1、J 37住居址がクラスター 3 である。同様に J 41号住居址では、J 41号住居址と切りあい関係にある J 40住居址、J 42住居址はいずれも加曾利 E III 式期であるが、J 40住居址はクラスター 4、J 42住居址はクラスター 5 である。さらに J 83住居址では、加曾利 E III (古) 式期の J 2住居址、加曾利 E III (新) 式期の J 75、J 77住居址があるが、J 83がクラスター 6 であるのに対し、J 2はクラスター 5、J 75、J 77住居址はともにクラスター 3 である。

一方、月出松遺跡での柄鏡形住居址の出現は、加曾利 E IV (古) 式期であり、集落の南側に位置する土坑墓群を挟んで約 30m 離れて、クラスター 2 の J 21住居址とクラスター 3 の J 36住居址が検出されている (図 4)。これらの柄鏡形住居址の近辺には、その前段階や同時期の同じクラスターの住居址はみられない。

このように、出現期の柄鏡形住居址の近辺には類似する住居址がほとんどみられず、類似度が高い住居址は周辺の複数の遺跡に分散しているのである。これはそれぞれの遺跡が単独に存在しているのではなく、周辺の遺跡が群として相互に連携を取り合っていることを示している。この様な集落間の関係を、佐々木藤雄は「地域共同体」、「地域内小集団」と呼び (佐々木 1998)、石井寛は、「地域集団」と呼んで概念化している (石井 2014)。

その後二ノ丸遺跡では、加曾利 E IV (古) 式期に J 60住居址、J 61 住居址、J 75住居址が中央土坑墓群の南側の住居址集中地区に、J 95が遺跡南西部の外縁部に単独で構築され、加曾利 E IV (新) 式期には J 34住居址が J 26住居址に隣接し、J 12 住居址は J 95よりさらに外側に位置している。月出松遺跡では、J 1 住居址や J 5 住居址のように遺跡の住居集中地区から完全に離れた、遺跡の北部の最外縁部に約 100m の間隔を空けて構築さ

れている。

この点に関して石井寛は、出現期の柄鏡形住居址は集中地区に現れ、その後は外縁部に展開しているとしている（石井2014）。確かに石井の指摘のように、出現期の柄鏡形住居は遺跡内の住居址集中地区や儀礼用と思われる遺構のそばで検出されている。しかしその後の加曾利EⅣ式期や称名寺式期式には、遺跡の外縁部に位置するものが出現するが、依然として集中地区にも継続して構築され続けている。

(2) まとめ

以上の検討結果を以下にまとめる。

住居址のもつ属性について、

- ① 各住居の遺構属性の組み合わせは非常に多様である。
- ② 柄鏡形住居址のもつ住居址の属性は比較的対応しているが、張出部をもつという理由だけで類似度が高いとは言えない。
- ③ 柄鏡形住居址は従来の遺構属性の組み合わせを引継ぎ、張出部、敷石・周礫を施したものである。

出現期の柄鏡形住居址は、

- ④ 出現場所の近辺には同一クラスターの住居址がなく、周辺遺跡に類似度の強い住居址が分布する。
- ⑤ 柄鏡形住居址は、遺跡内の住居の集中地区や土坑墓群の近辺に出現し、その後は同様な場所にもみられるが、遺跡の外縁部にも位置するようになる。

これらの分析結果から、柄鏡形住居址の導入と継承は、同じ集落内というよりむしろ地域の遺跡群全体に分散していたと考えられる。これが意図したものであるのかどうかは判断できないが、少なくとも各遺跡が単独に存在したのではなく、地域の各遺跡の結びつきが強いことを示すものである。

おわりに

本論では従来主観的な判断で行われていた住居址の分類を、多変量解析を用いて行った。その結果、従来の柄鏡形住居址の分類とは異なり、新たな視点を提示することができた。考古学の研究においては、研究者の恣意性を如何に排除するかが一つの課題であり、その観点からもこのような数学的な分析の有効性を示すことができたと考えている。しかし、今回の分析においてもその恣意性を完全には排除できていないことは自覚している。基礎データとして用いた調査報告書の記述に報告者の主観が入っていることはやむを得ないと

しても、その基礎データを多変量解析用のデータに変換する際に筆者の主観や判断が多分に入っているからである。ただそのような問題は残るとしても、他の研究者がのちに検証可能であることが、多変量解析の大きな利点である。

本論においては、柄鏡形住居址のもつ張出部の出現理由については言及できなかった。これについてもすでに多くの研究者がその考えを示しているので、その妥当性の検証についても、このような方法が有効であると考えている。

國學院大學の谷口康浩教授には本論の作成にあたっては多くのご指導、ご教示をいただきました。末筆ながら記して深く感謝申し上げます。

註

- 1) 本論においての時期比定は、「埼玉編年」を基軸とした細田勝の細分に従い（細田2008）、特に加曾利EⅢ（新）式期は、“吉井城山類型、渦巻文土器が出現する段階”とした。なお出土土器からの時期判別が複数の時期にまたがるものは、最新の時期を採用した。
- 2) 周礫は小礫と土を混ぜたもので主体部の壁に沿って帯状にめぐるものである。敷石と周礫は本来異なるものであるが、サンプル数が少ないため本論では、敷石と周礫を同一属性として分析した。
- 3) 石井の分類での「4本支柱穴」が「四角形」に、「5本支柱穴」と「奥壁5本型」が「五角形a」に相当する。また、石井は各住居址の柱穴配置を実測図原図により再検討を行っているが、本論では報告書の記載をもとに筆者の判断を加えたため分類に違いがある。
- 4) 今回のクラスター分析では、クラスターの数（k）を6とした。これは樹形図をクラスターの数と同じだけの縦棒の数になるように切断し（この場合は6）、各縦棒の下にある個体を同じクラスター内として分類するものである。クラスター数は分析するデータ数や結果の樹形図から決定するものであり、今回はデータ数が76と比較的多いことや、樹形図の枝分かれ状況からこの数とした。
- 5) 櫛原の分類に対し、本論では「支柱穴タイプ」は壁溝1に相当し、支柱穴と壁柱穴の混在する「壁柱穴Aタイプ」は壁溝2、「壁柱穴Bタイプ」は壁溝3ないし4に相当する。

引用文献

- 赤沢威・埴原和郎 1978「長野県与助尾根遺跡の統計学的分析」『季刊人類学』第9巻第2号、76~100頁。
- 石井 寛 2014「縄文中期から後期への推移に関する一考察 - 横浜市港北N.T.遺跡群を対象に -」『横浜市歴史博物館紀要』第18号、1~40頁。

- 榑原功一 1995「柄鏡形住居の柱穴配置」『帝京大学山梨文化研究所 研究報告』第6集、1~40頁。
- 佐々木藤雄 1998「縄文時代の土器分布圏と家族・親族・部族（下）」『先史考古学論集』第7集、49~88頁。
- 谷口康浩 2003「竪穴住居型式の分析からみた三内丸山遺跡の空間構成と変遷」『特別史跡 三内丸山遺跡 年報』7、49~53頁。
- 細田 勝 2008「加曾利E式土器」『総覧縄文土器』410~417頁、アム・プロモーション。
- 松岡達郎 1982「北海道白尻B遺跡における縄文時代中期の住居址について－多変量解析法による分類－」『北海道考古学』第18輯、35~53頁。
- 村田文夫 1975「柄鏡形住居址考」『古代文化』第27巻第11号、1~33頁。
- 本橋恵美子 1988「縄文時代における柄鏡形住居址の研究（一）」『信濃』第40巻8号32~44頁、9号52~65頁。
- 山本暉久 1976「敷石住居出現のもつ意味（上）（下）」『古代文化』第28巻第2号、1~37頁、第3号1~31頁。
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 1999『小丸遺跡』横浜市教育委員。
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2003『二ノ丸遺跡』横浜市教育委員会。
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2004『高山遺跡』横浜市教育委員会。
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2005『月出松遺跡・月出松南遺跡』横浜市教育委員会。
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2012『加賀原遺跡 佐江戸8遺跡』横浜市教育委員会。